

# キク・ヤマタ 山田 菊 —日本とフランスの女流文人<sup>1</sup>—

小山 ブリジット (Brigitte Koyama-Richard) (著)

西村 淳子 (訳)

19世紀末のフランスにおいて混血の人々は、アレクサンドル・デュマのように有名になった人物もなかにはいるが<sup>2</sup>、だれもが二つのルーツをもつが故の恩恵と不都合とを経験した。そのような人々の中に、自らの二重のアイデンティティーの証を誰よりも鮮やかに残した、フランス人でも日本人でもある女流文人がいる。それが、キク・ヤマタ (山田菊 Kikou Yamata 1897年-1975年)である。

1920年代のパリの文芸界で名の知られたキクは、この人物の本名であるが、ピエール・ロティ (Pierre Loti 1850年-1923年)の有名な小説『お菊さん』の女主人公とは全く違っていた。彼女は洗礼名のエヴよりもこの日本語名を名乗ることを好んだ。その当時混血であるということは容易なことではなく、自分が何

---

<sup>1</sup> 本稿は小山ブリジット著『パリの日本、明治から1930年代の日本人と日本愛好家』(スカラ出版、パリ、2018年) (Brigitte Koyama-Richard, *Le Japon à Paris, Japonais et japonisants de l'ère Meiji aux années 1930*) からの抜粋である。日本の読者のために多少内容に変更を加えた。本書では、出版社の了解を得て、西村淳子教授に翻訳をお願いした。ここにお礼申し上げたい。本稿に挙げた人物に関する注釈と文献表については上記の著書を参照していただきたい。

<sup>2</sup> アレクサンドル・デュマ (大デュマ Alexandre Dumas père とも呼ぶ) (1802年-1870年) は『三銃士』(1844年)などの有名な小説の作家。サン・ドマング (現在のハイチ) の白人と黒人の混血 (ムラート) の父とフランス人の母の間に生まれた。才能に恵まれたが、人種差別の標的にされることも多かった。

<sup>3</sup> キク・ヤマタの生涯と作品に関しては、3つの研究書がある。

Monique Penissard, *La Japolyonnaise*, Favre, 1988.

矢鳥翠『ラ・ジャポネーズ キク・ヤマタの一生』、筑摩書房、東京、1990年。

Denis C. Meyer, *Monde flottant, La médiation culturelle du Japon de Kikou Yamata*, L'Harmattan, 2009.

者であるかを追求することはなお難しいことであった。

キク・ヤマタ<sup>3</sup>は、フランス人の母親、しがない宿屋の娘であるマルグリート・ヴァロ (Marguerite Varot) と日本人の父親、山田忠澄との間にリヨンで誕生した。リヨンは、パリに次いで、留学や仕事のためにやって来た日本人が多く住む町だった。キク・ヤマタの人となりを理解するために、子ども時代を振り返る必要があるだろう。

## 山田忠澄：長崎からリヨンへ

山田忠澄は中国から長崎への輸入を任務とする役人の末子として1855年に長崎で生まれた。忠澄の誕生時の名前は、「山本壮次郎」であったが、10歳の時に山田家の養子となる。こうして壮次郎は、山田の姓を名乗ることになるが「壮次郎」という名は1887年「忠澄」と改名するまで変えていない。本来ならば、養子に入った家の父の仕事である目付めつけを継ぐはずであったが、1868年に起こった明治維新により、社会構造が完全に変化したため、養父とは別の歴史を歩むことになる。

山田壮次郎は、1808年長崎に創設された外国語学校で早くからフランス語を習う機会に恵まれる。1869年14歳のときこの学校に入学し、レオン・デュリー (Léon Dury 1822年-1891年) に師事するが、この人物は後に壮次郎の生涯に決定的な役割を果たすことになる。レオン・デュリーは、医師であり、外交官であり、教育者でもあったが、1860年、38歳のときに外科医兼函館の病院長となるため日本に赴いた。そして、ギユスターヴ・デュシェンヌ・ド・ベルクール (Gustave = Duchesne de Bellecourt 1817年-1881年) によって長崎のフランス領事に任命される。1858年日仏修好通商条約が締結された結果、ギユスターヴ・デュシェンヌ・ド・ベルクールは、1859年から1864年にかけて初代在日フランス領事となった。レオン・デュリーは、フランス語を教え始め、外交官の任務も1866年まで続けた。翌年、万国博覧会のためにパリに赴いた江戸幕府の公式使節団に同行した後、やがて東京と改名されることになる首都に戻り、開成学校、後の東京大学のフランス語フランス文学の教師となる。デュリーは1877年最終的にフランスに戻るまで日本に滞在する。デュリーは日本と強い結びつきを保ち、1891年に亡くなるまで日本の名誉領事を務めた。デュリーはフランスに帰国する時り

ヨンで技術を学ばせるために日本人の優秀な若者8人を連れて帰ろうと決心する。彼は、すでに6台のジャカード織機を日本に輸入させており、日仏両国の通商関係の発展のため、若い技術者の育成を願っていた。1876年、エミール・ギメ(Emile Guimet 1836年-1918年)が最後に帰国する直前自分の美術館の資料を翻訳し分類するために4人の若い日本人を紹介してくれるようにデュリーに頼んでいた。デュリーは即座に山田壮次郎を思いついた。壮次郎は1872年に学業を終えた後、日本にやってくる外国人の翻訳と通訳の仕事を政府の要請を受けて行っていたのである。壮次郎は喜んでデュリーの申し出を受けた。

改名して忠澄となった山田は、1878年22歳にしてフランスの地を踏み、リヨンに赴く。忠澄はフランス語を磨くためラ・マルティニエール工業高校に入学する。この高校は、エミール・ギメが運営していたが、中でもリュミエール兄弟<sup>4</sup>が通っており、後にギメは山田家の友人となる。次に、忠澄はリヨン大学付属応用化学研究所で学び、1885年まで化学肥料の会社で働く。そして、日本領事館で秘書となる。1893年、忠澄は7年間の婚約時代を経て、恋人マルグリットと結婚し、2年後の1895年に、二等書記官に任命される。キクは、1897年、忠澄夫妻の3人の子供の長女として誕生した。山田忠澄はさまざまな仕事をこなしながらも美しいリヨンの町で妻子ときわめて快適な暮らしを送っていた。忠澄はほかならぬ日本の絹織物産業に携わっていたが、日本の絹織物産業は当時輸出の拡大や品質の下落のために振るわなかった。忠澄は、「絹織物の検査官」として横浜に派遣されていた絹織物業者ポール・ブリューナ(Paul Brunat 1840年-1908年)と交流があった。ブリューナは、明治政府の要請により、日本の絹織物にフランス産絹織物と同等の品質と評判を与えるため、フランスを手本に群馬県の富岡に紡績工場を拓いた<sup>5</sup>。

---

<sup>4</sup> オーギュスト・リュミエール(1862年-1954年)とルイ・リュミエール(1864年-1948年)兄弟は、映画や写真の発展に大いに貢献したフランスの技術者、実業家。

<sup>5</sup> ポール・ブリューナは1872年紡績工場(富岡製糸場)の建設に、群馬県の富岡を選んだ。すべての機械は、フランス製だった。富岡製糸場は、1987年閉鎖され、2014年以来ユネスコの世界遺産に登録されている。佐滝剛広『日本のシルクロード』—富岡製糸場と絹産業遺産群(中公新書ラクレ)中央公論、2007年。同じく、クリスチャン・ボラック『絹と光:知られざる日仏交流100年の歴史(江戸時代~1950年代)アシェット婦人画報社、2002年。

山田は、入手し鑑定していた日本の生糸の紡績を研究するため、自宅に小さな実験室を作るほどであった。

フランスは忠澄の第二の祖国である。しかし、日本に行き活動を報告せよという命がとうとう下った。忠澄は妻とともに日本の地を踏み、短期間日本に滞在したのちリヨンに戻る。しかし、1908年、恐れていた最終帰国の命が下り、山田忠澄は心残りを感じながらもフランスを去る。東京に着くと、忠実な勤務の褒賞として日本政府から勲章を受ける。わずかばかりの慰めであった。30年フランスに滞在したことにより日本への再適応は極めて困難かつ不可能であった。フランスに長く滞在した同胞達と同じように、林忠正や黒田清輝、さらに、久米桂一郎、山田忠澄などはもはや自分の国を理解できず、深く苦しむことになった。

## キク・ヤマタは父の国を発見する

日本の生活は山田家にとって驚きに満ちたものであった。忠澄は、母国語をキクに教えることを拒み続け、キクをがっかりさせた。三人兄弟の誰も日本語が分からなかった。マルグリットの方は、収入が不安定であったにもかかわらず、約しくちっけな家の中を不釣り合いな威厳のある家具で一杯にし、フランス流の生活を貫いた。子供たちはフランスの学校に入れられ、キクは、自分を驚かせた日本という国、厳格過ぎるしきたりは拒んだとはいえたくさんの魅力を感じたこの国をもっとよく理解するために父の言葉を修得していなかったことを悔やんだ。キクがフランス人の大作家たちを発見したのは東京においてであった。そして、日本文化についての知識を深める必要があることを、後にパリで理解する。キク・ヤマタは日本では常に自分を外国人であると感じていた。しかしまたフランスにおいても決して本当のフランス人とは認められなかった。1917年父が亡くなると、妹のハナ（花）は大富豪の大蔵家に嫁ぐ。ハナの夫は、「あまりにもフランス人的な」ジャーナリストである義理の姉の前衛的な考えから妻を遠ざけたいと考えて、キクにフランスでの学業を援助すると申し出た。キクは即座に申し出を受け入れ、1923年パリに発ち、2年間ソルボンヌ大学で芸術史の授業を受けた。

## 女流文人の誕生

キク・ヤマタは自分の文壇へのデビューをこう語っている。「私が文壇にデビューしたのは東京でのことでした。18歳でした。当時アルベール・メイボン<sup>6</sup> (Albert Maybon 1878年-?年)氏は1914年の大戦のさなかに東京で日仏両語の雑誌『極東情報』を出版しようとしていました。私は、メイボン氏に『冬の夜』*Nuit d'hiver*というタイトルの原稿を送りましたが、<sup>クリサンテーム</sup>Chrysanthème (キク)とサインするよう求められました。後に、私は2年に渡って秘書兼編集者としてこの雑誌に携わることになります。タイプはひどく下手でしたが、<sup>さだやっこ</sup>貞奴<sup>7</sup>にインタビューに行ったり、「サロン・ド・トウキョウ」をリポートしたりしました。不思議なことに、日本の生活での出来事をフランス語で書いているうちに、また、筆を通してきわめて独特な日本の魅力に触れているうちに、日本の魂、世界でも類をみない日本の文化に強く愛着を持つようになりました。筆を通して愛着を感じ、着物を着はじめ、生け花を習い始めました。古今集<sup>8</sup>を読んだり、能を学ぶためには先生に就きました。それでも、私の言葉はやはりフランス語のままでした。そして、8年間アメリカのAP通信社で英語を使って働きました。ここでもまた秘書兼編集者として、日本を題材にしていました。しかし、私の最初の出版は、友人の世話で東京で出版したフランス語の小冊子『譚詩と散策』*Ballade et Promenade*でした。この小冊子には、たとえば、<sup>よこおのぞうし</sup>横笛草紙<sup>9</sup>の中の簡単な物語と個人的な印象が書かれています。黒い小さな版画がついており、表紙は、青い千代紙<sup>10</sup>で、白い鴉の模様があります。この小冊子は、丸善<sup>11</sup>で売り出しました。

フランス語で出版しようと決意して英語を捨ててフランスに発ったとき、この小冊子を持って行き、ディヴァン社で売り出しました。...こんなデビューができたのは、フランス人が日本精神の恵みに好奇心をもち、好んだおかげなのです。

<sup>6</sup> 日本で活動していたジャーナリスト。

<sup>7</sup> 有名な女優川上貞奴 (1871年-1946年)、演出家、俳優の川上音二郎 (1864年-1911年)の妻。二人は、1899年サンフランシスコで、1900年にはロンドンとフランス、他、ヨーロッパで行った公演でめざましい好評を得た。

<sup>8</sup> 「古今集」とは、10世紀に編纂された勅撰和歌集、古今和歌集のこと。

<sup>9</sup> 横笛草紙は、室町時代の物語。

<sup>10</sup> 千代紙は浮世絵と同様、木版刷りのモチーフを飾った伝統的な和紙。

<sup>11</sup> 丸善は、1869年東京に設立された有名な書店で、洋書の紹介や輸入に大きな役割を果たした。

受け入れられたのは、私ではなく、私が日本から持って行ったものなのです。<sup>12]</sup>

## クリサンテーム Chrysanthème とパリのサロン

パリに到着すると、キク・ヤマタ（以後彼女は自分の名を Kikou Yamata と綴ることにする）はパリのサロンに招待され、とりわけ、批評家であり小説家のリュシアン・ミュルフェルトの寡婦、ジャンヌ・メイエル・ミュルフェルト（Jeanne Meyer Mühlfeld 1875年-1953年）のサロンに通う。この有名な「黄色いサロン」は夫人の義理の弟、画家でありポスター画家であるレオネット・カッピエロ（Leonetto Cappiello 1875年-1942年）が装飾を施したものであるが、1920年代最も評判の高い文芸サロンであった。毎日お茶の時間に、ポール・ヴァレリー（Paul Valéry 1871年-1945年）やアンドレ・ジッド（André Gide 1869年-1951年）、コレット（Colette 1873年-1954年）、ボニ・ドゥ・カステランヌ（Boni de Castellane 1867年-1932年）、ジャン・コクトー（Jean Cocteau 1889年-1963年）、レオン・ドーデ（Léon Daudet 1867年-1942年）など多くの文人たちが通っていた。キクは後にこの幸せな日々やこの有名なサロンへのデビューを回想している。「1923年のある日曜日、私は、着物姿でミュルフェルト夫人のサロンに到着しました。そこで、政治、軍事、芸術、文学などの話題に出会いました。ほぼ20年の間友人達に魔女と呼ばれていた夫人はこんな風にお膝元にパリの名士たちを迎えたのでした。ミュルフェルト夫人は、ポール・ヴァレリーの名を高めた人物です。日本というルーツのおかげで、私は、そのときから夫人のお茶のテーブルに座ると共に、文学界へのデビューを果たすという恩恵に浴しました。夫人は私にアンナ・ドゥ・ノワイユ（Anna de Noailles 1876年-1933年）<sup>13</sup>の話聞くよう促しました。アンナ・ドゥ・ノワイユは、小さなドレス姿にまっすぐな姿勢で、カラスの羽のような漆黒の素晴らしい目、情熱的な口をして、派手なショールを引きずっていました。友人には誠実ですが、評価は辛辣なこのサロンの女主人ミュルフェルト夫人のおかげで、私は自分の目をパリの最も厳しい目の中に置き、控えめに自分の声も紛れ込ませながら自分の時代を表現する人々の声を聞く喜びを味わうこと

<sup>12</sup> ジュネーヴ古文書館文献 ms fr 6327 5 f005R。

<sup>13</sup> フランスの詩人。

ができました。<sup>14</sup>」

これらのすべてのインテリたちに見張った娘は、自分も瑞々しさと知性、異国情緒のある姿で、彼らを魅了した。キクはまたエドメ・ドゥ・ラロシュフーコー公爵夫人のサロンにも出入りし、親しみを込めて「日本のリヨン人」（ジャポリヨネーズ）という愛称で公爵夫人にかわいがられた。キク・ヤマタは手帳に公爵夫人についてこんな風書いている。「詩人であり、画家、フェミニストであり、4人の立派な子ども達の母であり、すでに孫たちのおばあさまでもあるラ・ロシュフーコー公爵夫人のサロンには、ルイ14世の時代のように4世代の人々がそろっていた。<sup>15</sup>」

ポール・ヴァレリーの後ろ盾を得て、キク・ヤマタはほかのたくさんのサロンにも出入りした。キクという名前はピエール・ロティの小説『お菊さん』でフランス人にもとてもなじみがあったので、こういう人々にとっては、キク・ヤマタは日本の代表的存在であった。彼らにとって、キク・ヤマタこそ日本という国について書くのに最もふさわしく、信頼できる人物だったのである。着物を着るように頼まれると、喜んで引き受けた。日本のことを話すよう求められると、数々の講演を行った。書くように励まされて、1924年には、説話や伝説を集めた『日本人の唇の上に』*Sur des lèvres japonaises* を書き、ポール・ヴァレリーが序文を書いた。

「キクさま、

二つの祖国をもち、二つの言葉をもち、二つの身なり服装を楽しむ、本質的に心の底から二重性をもつあなたの血の一滴一滴の中に、このきわめて異質なものが存在するが故に、あなたの二つの言葉のうち的一方に、もう一つの言葉の優れた文学から選んだ説話や詩を移し替えたいかなるのでしょう。あなたが私たちに書いてくださる短編はおよそ一つの思想に等しい大きさをもっています。...

あなたの優美な作品の中に、受け継ぐべき思索や教訓があります。あなただけにしかできない仕事に感謝したいのは、おそらく私だけではないと確信しています。』

キク・ヤマタが二重のルーツをもっていることが、同時代人には一種の信憑性

<sup>14</sup> ジュネーヴ古文書館文献 ms fr 6327 5 f013R。

<sup>15</sup> ジュネーヴ古文書館文献 ms fr 6327 5 f 001。

の証となった。この若い娘は日本語の書物を深く読むことはとうていできなかったのだが、日本人の父親をもち、数年間日本に住んだ経験があるということだけで、この国の専門家と見なされるに十分であった。キクの文学の才能は確かだった。始めて書いた小説『マサコ』*Masako* (1925年)は、批評家からも称賛され、大成功を収め、色々な言語に翻訳された。一年間、『マサコ』を執筆している間は、作家でもありストック社の校閲者でもあったジャック・シャルドンヌの助言を得るという幸運に恵まれた。

「マサコ」とはこの小説の女主人公の名前である。伝統的な家庭に育ったマサコには、見合い結婚しか道はなかった。それでもマサコは恋をする。様々な苦勞の末に自ら選んだ男性と結婚する。

「私は、真紅のちりめんの花嫁衣装をまとい、髪を結び、青ざめた顔に白粉を塗った。...私は顔の上に袖を畳み、しきたり道り同意の印として、着物の裾を持ち上げた。静かな幸せに浸っていた。

— 結ばれたら誠実さだよ、マサコと息を漏らしながら彼はつぶやいた。彼の手が私の着物の中に滑り込んだとき、私はもはや私自身ではなく、彼の生きた欲望と化していた。<sup>16</sup>」

キクの創作は2つの時代に分かれる。若い時代と第二次大戦後である。キク・ヤマタは、読者の期待する小説、つまり、芸者や宮廷人、高貴な婦人などの登場する古き時代の日本についての小説を書いた。『静御前』*Shizuka Princesse tranquille* (1929年)のために、藤田画伯が美しい肖像画を描いてくれた。藤田は、当時はまだ藤田嗣治と名乗っており、ずっと後になってからレオナルドという名前になったのだが、この絵は本のはじめのページに掲載されている。日本の画家藤田とキクの間には誠実な友情が生まれた。キクはこの本の序文でこんな風書いている。

「白拍子<sup>17</sup>の中でも私は、ロマンのある悲劇的な歴史上の人物、有名な静御前<sup>18</sup>

<sup>16</sup> *Masako, Stock, 1925, p.178-180.*

<sup>17</sup> 白拍子とは、平安時代末期から鎌倉時代に掛けて行われた歌舞を歌い踊る遊女。

<sup>18</sup> 7世紀末有名な白拍子であった静御前。源義経の愛妾。

を選んだ。静御前は、僧侶や能の作者、浮世絵の彫り師、古典劇、文楽の作家などに着想を与えた。

静御前は日本の女らしさや日本の恋愛の心理を体現する存在である。控えめさ、優しさ、才能、しとやかさ、勇氣など、この大胆さとこの慎みを兼ね備えているが故に静御前は、天皇の京都と鎌倉武士の両方の側に仕えた生粋の宮廷人といえる。

結局、静御前は、日本史上偉大な武士、義経に愛され、尼僧となり、亡くなる運命にある。このことは、美しさにおいても、心持ちにおいても、また、時には自分自身や自らの徳さえもことごとく捧げる偉大な歴史的人物の系譜にふさわしく、彼らの愛においては二人を満たすことができるものは存在しないのである。<sup>19)</sup>

## キク・ヤマタと画家コンラッド・メイリ

その前年、1928年、キク・ヤマタは生涯をともにする恋人に出会った。キクの講演に来ていたスイス人画家コンラッド・メイリ（Conrad Meili 1895年-1979年）である。二人は1932年に結婚する。メイリはキクを慕ってはいたものの誠実ではなく、そのためキクは苦しむことになった。生涯キクは自分の筆で生計を立てねばならず、自分の儲けたものはすべて自分で浪費する浮気な夫に頼ることはできなかった。キクは1930年、もう一つの小説『金鶉の緯』*La trame au milan d'or* を出版する。

キク・ヤマタは生活のために、ギメ美術館やサロン・ドトーン<sup>20)</sup>で多くの講演や生け花の実演を行った。日本の小説の翻訳も行った。キクは1929年に短期で日本に行ったほか、第二次大戦の直前に日本に戻る。10年間日本を離れることができなくなり、特高<sup>21)</sup>に尋問を受け、拘留されることにさえなった。キクはその年月の苦渋の思いを記憶に留めることになる。

<sup>19)</sup> *Shizouka princesse tranquille*, Édition M. P. Trémois, 1929, p. 11.

<sup>20)</sup> 絵画、彫刻、写真などを紹介する多分野の秋の展覧会。1903年にパリで生まれ、現在も続いている。芸術の発展を奨励することを目的としている。

<sup>21)</sup> 特別高等警察。明治末期から第二次大戦終戦まで続いた治安維持、思想統制、言論弾圧のために設置された日本の秘密警察。1945年10月連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）によって廃止された。

ヨーロッパに戻ると、キクが若い時代にあれほど愛していたあの日本の牧歌的なイメージは色あせてしまっていた。日本には浮世絵が醸し出す夢のようなイメージはもはやなかった。キク・ヤマタは文筆によって生計を立てることが困難になっていた。というのも、読者たちはもう日本への興味を失っていたからである。苦渋と幻滅の中で、キクは出版社に手紙を送った。これは『麗しき夫人』*La Dame de beauté*（1953年ストック社から出版）の中に公開されている。

「出版社殿、

1923年、私がパリに到着したとき、貴社は私をやや謎に満ちたとても日本的な女性だと思われました。私は、シャラント地方にある貴社の敷地を着物姿で散歩していました。私は、ジャック・ドゥラマン<sup>22</sup>の月の色をしたインコをあたかもメーテルリンク<sup>23</sup>の青い鳥であるかのように勘違いしていました。

今、私はそんなに変わりましたでしょうか。私のフランスの身分証明書の写真は、まるで木こりの割った丸太のように、あるいは外科医が切り離したシヤム双生児のように真っ二つに切り裂かれた姿に見えるのでしょうか。

ポール・ヴァレリーがこう書いたのは間違いでしょうか。

「キクさま、

二つの祖国をもち、二つの言葉をもち、二つの身なり服装を楽しむ、本質的に心の底から二重性をもつあなたの血の一滴一滴の中に、このきわめて異質なものが存在するが故に、あなたの二つの言葉のうち的一方に、もう一つの言葉の優れた文学から選んだ説話や詩を移し替えたいくなるのでしょうか。」

私がフランス語を身に付けたのは、リヨンの日本領事であった父のおかげであることをお忘れではないでしょう。フランスの生活への直感は、ブルギニヨン出

---

<sup>22</sup> ジャック・ドゥラマン (Jacques Delamain 1874年-1953年)、フランス人の鳥類学者。作家のジャック・シャルドンヌの義兄。彼は義兄のモーリス・ドゥラマン、義弟のジャック・シャルドンヌと協力し、ストック社を買い取り、鳥類学の本をたくさん出版した。シャラント県サン・ブリースにあるドゥラマンの敷地は、鳥の安らぎの場所であり、芸術家や文人が多く訪れた。

<sup>23</sup> モーリス・メーテルリンク (Maurice Maeterlinck 1862年-1949年)、ベルギー人作家。『青い鳥』の著者。この作品は1908年に始めてモスクワの芸術劇場で5幕の童話劇として紹介された。

身のリヨン女性である母から受け継いだということも。

私は長い間、この二つの半分の世界、この西洋とこの東洋が、完全な存在を構成するには必要なものだと思っていました。でも、私は、日本の生活の美的な魅力を糧に生きていました。それは、もともとおぼろげで、黄色い大陸の詩的な飛び地のようでした。私は、その魅力をフランス語の知性が求めるがままに、知的な言葉の気まぐれのままに寄せ集めていました。デュ・ベレ<sup>24</sup>によって立派になった言葉、フランス語の一つ一つの言葉の中に珠のようにころがる奔放さをもって。

私は、本能的な叫び、肉体の叫びを上げざるを得なくなるこんな戦いを予期していませんでした。政治に首を締められました。あげくの果て私は「フランスの方がいい」という叫びを上げることになりました。

このような目にあった後、どうすれば魔の手が敵対させようとした二つの祖国を自分の中で和解させられましょうか。

どうすれば、軽蔑と憎しみを超越して生きるまでとはいわないまでも、そういうものの外で生き延びることができるのでしょうか。

私は、琥珀の皮膚の下にある日本、密かな内奥の表れの中に他の民族や他の国と共有しうる日本を再発見しました。

ここでは、率直に大仰な言葉を使わなければなりません、それは、人間性とか普遍的な感情だと。<sup>25</sup>」

この『麗しき夫人』はキク・ヤマタの経歴の絶頂期を画す作品といえるであろう。容姿端麗な女主人公は結婚に幻滅し、妻の完璧さを煙たがっているらしいこの浮気な夫から遠ざかる。主人公の父は、美しさ故に娘が傷つくのではないかとすら案じていたほどであった。「諺でいうように、美しすぎると女は決して幸せになれない、と父は案じた。<sup>26</sup>」話は第二次大戦のさなかのことである。『爆撃に焼かれた暗黒の日々がやって来た。大磯の空には、海岸沿いに北の方からぶんぶん音をたてて敵の小隊が編隊を組んで次ぎ次ぎに通り返った。あらゆる色の閃光

<sup>24</sup> ジョアシャン・デュ・ベレー (1522年?-1560年)、詩人。『フランス語の擁護と顕揚』を書いて、ラテン語に対抗して、フランス語を擁護した。

<sup>25</sup> *La Dame de beauté*, Editions Stock, 1953, p.12-13.

<sup>26</sup> 同書、p.129.

に打たれて、鉄道沿いに工業地帯が火を噴いた。その輝きが丘の上を照らしていた。<sup>27)</sup>』

夫のハヤシ(林)氏がどれほど妻を愛していたかを理解したのは、妻が亡くなってからのことであった。こんな喩えをせずにはおれなかった。「嘆きのあまり、彼は妻の名を口にした。唇は、今になって愛と後悔と共にその名をつぶやいた。妻の美しさは、汚されたことがなく今も誇り高い祖国の美しさと同じではないか。彼は軽蔑や傲慢さですら愛していた。そして、決して再婚することはなかった。<sup>28)</sup>」とキク・ヤマタは締めくくっている。

自らの存在を成す二つの部分に引き裂かれて、キク・ヤマタは書き続けるが、決して本当に内面の平穏を取り戻すことはなかった。最初ガリマール社から1933年に出版された『芸者達の生涯』*Vie de Geishas*は『三人の芸者』*Trois Geishas*というタイトルで、ドマ社から再版された。キクは読者へのメッセージを付け加えようとした。

「ここにある芸者の人生は作り話ではありません。...芸者たちは、詩的でたくましい気質、何世紀にも渡って同じ教養を身に付けてきたのです。<sup>29)</sup>」

21ページにも渡る長い序文を加え、芸者とは何かを定義しようと試み、自分がそのことを熟知しているということを証明しようとした。

「芸者は娼婦ではありません。日本語で芸者という言葉は、「芸の人」を意味します。私は「芸術家」と訳します。音楽家でも踊手でもある芸者はそう呼ばれる資格があります。... あなたに芸者のことを語る資格がありますか、とか、芸者と付き合ったのですか、と言われるかもしれません。

私の最初の日本の思い出は、父が長い間のリヨンの領事館時代を終えて日本に戻るとき、神戸での乗り継ぎの時から舞子が関わっています。京都の大きな「絹織物業者」が父を丘の上にある料亭に招待しましたが、遠慮のない少女だった私は、母と一緒に父に同行しました。何かを食べたかどうかはもう覚えていません。私は舞子さんたちと遊びました。あまりに化粧を塗りたくっているのも、まるで

---

<sup>27)</sup> 同書、p.186.

<sup>28)</sup> 同書、p.187.

<sup>29)</sup> *Trois Geishas*, Domat, 1953, p. 9-10.

赤い目をした白うさぎのようで驚きました。舞子さんたちは舞を舞い、私は一緒に飛び跳ねていました。舞子の顔の濃い色の肌が、まぶたや唇のあたりで白い白粉<sup>おしろい</sup>を縁取っていました。私はまるで裂け目から現れるかのような目や口から目を離せませんでした。…

こういう人たちに対して読者の関心を喚起する時がきていたのです。芸者の時代は、浮世絵の世界ですから。<sup>30</sup>」

キクの小説『神無月』 *Les mois sans Dieu* (1956年) はキクの親族の生活についての自伝的な部分を含んでいる。1960年キクは、英語から谷崎潤一郎の小説『悲恋二話』 *Deux amours cruelles* の美しい翻訳を行った。序文を書いた作家ヘンリー・ミラー (Henry Miller 1891年-1980年) はこんな言葉を残している。

「私の日本への情熱はラフカディオ・ハーンとともに始まった。次いで、北斎、歌麿、広重、そして、紫式部 (『源氏物語』)、絵筆をもった詩人雪舟<sup>せつしゅう</sup>、…しかし、私をもっとも心を動かされるのは、日本女性である。

数年前、私はキク・ヤマタの『三人の芸者』を読んだ。第三巻のツマキチの話ほど美しく、恐ろしく、極めつけの大胆さをもった物語は読んだことがない。

これほどまで驚異的に不可思議で、魅力的で、途方もない世界を発見する楽しみと喜びは、私には、月の反対側を見ることができると同じぐらい素晴らしいことに思えた。それは、長い間隠されていた世界ではあるが、思ったほど近づきがたい世界ではない。まるで私たちが夢によって垣間見ることができる自分の魂の一部と少し似ている。それなしには私たちの不思議な存在の本性を決して捉えることができないような部分である。<sup>31</sup>」 (ヘンリー・ミラー、ビッグサー、1960年8月4日)

ヘンリー・ミラーが語った「不可思議な日本」はジャポニズムの時代から人々を魅了し続けている。キク・ヤマタはそれをよく理解し、封建的でも近代的でも

<sup>30</sup> 同書、p.9-32。

<sup>31</sup> Tanizaki Junichirô, *Deux amours cruelles*, traduit par Kikou Yamata, préface d'Henry Miller, Stock, 1960 (1979), p. 13-16.

ある日本のイメージを巧みに提供した。キクはスイスで生涯を終えた。あれほど愛し、1970年に亡くなった夫の国である。キクは二つの文化、二つの社会と三つの国の混血であり、ずっとそうあり続けた。ジュディット・ゴチエ (Judith Gautier 1845年-1917年)<sup>32</sup>と同様、筆一本で生きた素晴らしい女流文人の作品はほとんど忘れ去られてしまった。今こそ、この才能ある小説家、当時のフランスと日本の関係の証人を再評価すべき時である。

---

<sup>32</sup> ジュディット・ゴチエ (1845年-1917年)、女流文人、熱心な日本研究者。有名な作家テオフィール・ゴチエ (1811年-1872年)の娘。Brigitte Koyama-Richard, *Le Japon dans la littérature française de la fin du XIXe siècle au début du XXe siècle*, Série 2 : 1900-1910, Edition Synapse, 2010 . 小山ブリジット監修・解説『フランス小説に描かれた日本』第2期 1900-1910 (復刻集成版全6巻)、シナプス社、2010年。



图 1

Léonard Tsuguharu Foujita, *Portrait de Kikou Yamata*, 1926. Peinture traditionnelle japonaise et encre de Chine sur soie, 50 x 27,5 cm. Collection particulière.



图 2

Léonard Tsuguharu Foujita, *Portrait de l'artiste*, 1926, Huile sur toile, 81 x 61 cm, Lyon, musée des Beaux-Arts



图 3

Léonard Tsuguharu Foujita, *Nu couché à la toile de Jouy*, 1922, Huile sur toile, 130 x 195 cm, Paris, Musée d'Art moderne de la ville de Paris



图 4

Léonard Tsuguharu Foujita, *Yamata et Foujita*, 1927. Illustration pour le livre *Les Huit renommées* de Kikou Yamata



图 5

Henri Martinie, Kikou Yamata, vers 1930

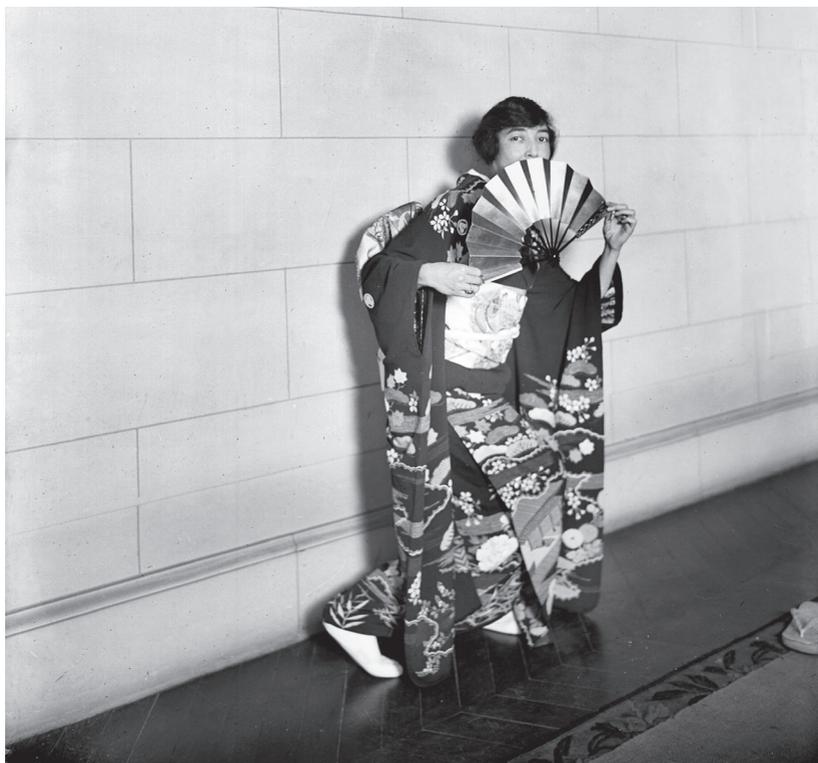


图 6

Albert Harlingue, *Kikou Yamata*, vers 1930



☒ 7

Albert Harlingue, *Kikou Yamata chez elle*, 1928



☒ 8

Henri Martinie, *Conrad Meili en compagnie de son épouse Kikou Yamata*, vers 1930